

ロシア語とソ連邦諸民族語

笹尾道子

はじめに

ソ連邦は驚くべき多民族、多言語の国家である。土着の言語だけで約125種もある。それらの言語を話す人々は次第に交流の場を広げ、ある地域では複雑に混り合って暮らすようになり、いくつもの言語を話す者もいる。その中で、ロシア語を母語、あるいは第2の言語として話せる者の数が増えている。田中克彦は、「ソ連邦の成立は、各地の方言や少数言語を、大文明語へと統合していく流れに大きく貢献したのである」¹⁾と述べている。ことばは人間にとってもっとも本源的であるとする田中は、「ことばは守られなければならない」²⁾と主張する。果たしてソ連邦では、ロシア語が他の民族語を「押しつぶそう」(Squeeze out)³⁾としているのだろうか。少数民族語は「守れる」ものなのだろうか。

I 共通語としてのロシア語

ソ連邦には現在150以上の民族・人種グループが住み、そのうち約125が土着民であるとされている⁴⁾。その規模は、1億3千万人を超えるロシア人や、たった数百人のアレウト人など、大小さまざまである。70が文字言語を持つ。その中の50は、革命後に文字が作られた。比較的大きな民族グループの名を取って、15の共和国、20の自治共和国、8の自治州、10の自治管区が

形成されている。16自治共和国と5自治州、それに自治管区のすべてがロシア連邦共和国内に存在する。残りの2自治共和と1自治州がグルジア共和国に、1自治共和国と1自治州がアゼルバイジャン共和国に、1自治共和国がウズベク共和国に、1自治州がタジク共和国にある。それぞれの組織体自体が多民族で構成されており、非常に複雑な様相を呈している。

1979年の国勢調査によれば、ソ連邦総人口は約2億6千万。そのうちロシア語を母語とする者58.6%、ロシア語を第2言語として自由にあやつる者23.4%である。合わせると総人口の81.9%がロシア語を話せることになる⁵⁾。ロシア人の99.9%と、非ロシア人の13.1%がロシア語を母語としている。ロシア語以外の他民族言語を母語としている非ロシア人は1.4%にしかすぎない。非ロシア人でロシア語を母語とする者の割合は、1926年9.6%、59年10.8%、70年11.5%、79年13.1%と増えてきているのに、全人口中、ロシア語を母語とする者の割合が、1926年57.5%、59年59.7%、70年58.8%、79年58.6%、と59年以降むしろ減る傾向にあるのは、ロシア人が全人口中に占める割合が減ってきていることと関係する(1926年47.5%、59年54.6%、70年53.4%、79年52.4%)⁶⁾。しかし、ロシア語を第2言語として自由にあやつる者も入れると、ロシア語の話し手の割合は、1970年の76%から、79年の81.9%へと顕著な伸びを示している。

2言語併用者の数は、1979年の調査から推量すると⁷⁾、7,400万人くらいで、全人口の28%くらいである。ロシア人の4%弱が2言語併用者なのに対し、非ロシア人では55%以上が、2言語あるいは3言語を使用している。もっとも、所属民族および言語について調べる際、各人(子どもについてはその親)の申告にもとづいて統計をとっているから、どのくらい「自由にあやつる」のかは定かではない。いずれにしても、ロシア人と非ロシア人では、このように2言語併用者の比率に大きな差がある。これは中小の民族ほど、接触の深い他言語との2言語併用者になり易いということだけでなく、第2言語としてのロシア語の比率も80%以上であることから、ロシア語が共通語としての地位を、ますます高めてきたことを意味する。さらに共和国と同名の民族中、30—39歳の54.1%がロシア語を第2言語としているが、20—29歳では64.5

%に達することも、ロシア語の前進を裏付けている⁸⁾。

ロシア語が共通語（ソビエトで使われている用語では民族間言語）となった理由について、ソビエトのイサエフが次のことがらを上げている⁹⁾。

1. ロシア語はソ連人の6割が母語としている。
2. 2千万を超えるロシア人がロシア共和国の外に住んでおり、そのためロシア語が非ロシア人の間にも広まっている。
3. ロシア語は、同じスラブ系の言語であるウクライナ語とベロルシア語に非常に近い。これらを母語とする者を合わせると、およそ7割に達する。
4. 経済・文化の面で、ロシア民族は、革命後も特別の役割を果たしてきた。
5. ロシア語は、世界の豊かな言語の1つである。
6. ロシア語は他の民族語を豊かにしつつあると同時に、それ自身、他の言語から多数の借用語を受け入れながら発展している。

ハナザロフもほぼ同様の理由をあげている。そしてソビエトの学者たちは、ロシア語は強制されたものであるという西側学者たちの意見を意識して、ロシア語は国民の自由意志によって、民族間言語に選ばれたこと、民族語もそれぞれめざましい発展をしていることを、くり返し強調している。ロシア語は強制的な国家語ではなく、この点でロシア語、まれに共和国の民族語を、国家語と呼ぶ一部のソ連人の誤りを、例をあげて批判している。「例外なしにすべての言語の平等の権利が、我々の多民族国家の言語政策の基礎である。」¹⁰⁾

強制しているかしていないかは別として、150以上もの言語をかかえる国で、何か共通語のようなものがなければ、不便きわまりないであろうことは想像できる。NHKのシルクロード取材班が、中央アジアのある所で、通訳を何人も介して、少数民族の老人と話をしている場面があったが、ごく簡単な質問の答えが返って来るのに、かなりの時間を要していた。たまになら面白いと言ってすませられても、これが日常の生活だったら、やがてがまんできなくなるであろう。いきおい、少数民族は、まわりのより大きな民族の言

語をも習得することとなる。共和国単位での共通語には、おもにその共和国内で多数派の民族の言語がなる。強力な多教派がない所では、複数の言語がその役割を果たす。そして全国単位では、過半数を占め、しかもそのかなりの部分が、革命前から全国各地に散らばって住んでいたロシア民族の言語を、共通語として選ぶのが自然であろう。これが他の何語であっても不自然である。たとえばロシア語の次に話し手の多いウクライナ語だと、ざっと3,500万人で、全人口に占める割合は13.5%に落ちてしまう。スイスのように、国内で使用されている言語のすべてを、国語あるいは公用語と定めるのが、言語的民主主義というものであるが、スイスでは4つの言語しか使用されていないからできることであって、ソ連邦で同じようにしようとしたら、文字言語だけを取り上げても70にも及び、もう少し集約して共和国単位にまともでも15言語で、翻訳・通訳に費やさねばならない労力は大変なものであろう。もっとしぼって、数の上から上位4言語を選ぶことにすると、ロシア語、ウクライナ語、ウズベク語、ベロルシア語の順になり、スラブ系の言語が3つも入ってしまう。5位以下はあまり数の差のない言語が続く。どの言語を選ぶかは大問題である。やはりここは、数の上で突出したロシア語1つに落ち着くのが無難であろう。しかし、出版やラジオ放送、初等教育などは、かなり少人数の民族語でも行われているようであり、公的な場からすっかり締め出されているわけではない。ただし無文字言語の中には、家庭内とかのほんの狭い範囲でしか使われなくなってきているものもあるらしい。

こうしてみると、イサエフのあげた事項のうち、1から3までで、ロシア語を共通語（民族間言語）に推す理由は十分であるように思われる。4の、ロシア民族の果たしてきた役割については、これをあまり強調すると、ソ連邦の憲法で規定されている諸民族の平等の原則（第6章第36条）と矛盾してきはしないか。「偉大なるレーニンの言語」¹¹⁾はまだ良いとしても、「偉大なるロシア民族の力強い言語」¹²⁾という形容はどうであろうか。「ソ連邦において、ロシア語は強制的な国家語ではない。しかしそれは、ソビエトの平等の権利を有する諸言語の中で一番目のものである」¹³⁾という表現や、「我々は今日、尊敬と誇りをもって、すべての兄弟民族の長兄であり誠実な友である

偉大なロシア民族のロシア語について……語る」¹⁴⁾といった表現も、完全対等平等の印象とは少し違うように思う。

II 2 言語併用

1979年にタシケントで、ロシア語教育にたずさわる学者、教師、政府・党関係者らを集めて、「ロシア語はソ連邦諸民族の友好と協力の言語」と題した全ソ学会議が開かれた。ここでは、諸民族のロシア語の知識がまだまだ貧弱なこと、ロシア語学習の重要性が強張され、民族学校におけるロシア語教師の質の向上、課外活動も含めたロシア語学習時間数の増加、他の教科もロシア語で教えること、ラジオ・テレビの利用、そして特に、ロシア語学習開始年齢を引き下げることの必要性が語られた¹⁵⁾。同時に、これには種々の解決を急がれる問題があること、たとえば教師や教科書の不足、あるいは第2言語を何歳から学ばせるのが良いかについて、生理学的、教育心理学的研究の必要性などについても指摘があった。しかし、母語をしっかりとマスターしないうちに第2の言語を学ぶことへの疑念については、現代科学の見地からは根拠がない、とプロコフィエフ文部大臣は言い切った。すでにグルジアでは、実験的に4歳の子どもに週3回、3時間ずつロシア語会話を教え始めている。ウズベク、ウクライナ、モルダビア各共和国、バシキール、ヤクート他の自治共和国でも、就学前の6歳児¹⁶⁾にロシア語を教える試みが始まり、好成績を収めているらしい。ロシア語学習の低年齢化が進められると、おそらく母語と同じように話す子どもたちが増えるであろう。教育水準も高くなっていくから（高等教育はロシア語で行われることが多い）、非ロシア人の2言語併用者は、今後ますます増えていくであろう。

では彼らの母語はこれからどうなるのか。民族語には、ロシア語からの借用語が大量に入りつつあるが、どのように変化していくのだろうか。

アメリカの学者 Bruchis は、ソビエトの言語政策の究極の目的は、非ロシア語を押しつぶすことであり、ロシア語と民族語の関係は、ソビエト側が言うような二方向の相互作用ではなく、ロシア語から民族語への一方向のみの

作用で、民族語は構造的にも破壊され、消滅させられていくと考えている¹⁷⁾。

田中克彦もまた、「近代国家は、資本主義たると社会主義たるとを問わず、異族のことばや方言を消して、単一言語の中に呑み込んで行く性質をもつ」¹⁸⁾とし、次のように言う。

いうまでもなく、言語と民族（的集団）は、国家が成立するよりはるか以前からあった。国家があろうがなかろうが、人は何か特定のことばや方言を話しており、そのことばによって集団が形成されるからである。この意味においては、人間にとって言語が最も本源的で自然に近く（したがって文化から遠く）、次に民族があり、最後に、自然から最も遠いところの、人為の極に国家が位置することになる。人間にとって最も本源的である母語の権利が、いわば自然権に属するならば、母語を用いる権利と、そこから派生する民族自立の権利は、国家の利害をこえて、何よりもさきに優先されなければならないということになる¹⁹⁾。

ユダヤ人の例などもあるので、人間にとって言語が最も本源的であるということには疑問があるが、母語を用いる権利は完全に保障されなければならないのは当然である。しかし、一方でより広く通用することばを身につけたいと願うのも現代人の一面であろう。

ソビエトの学者は、民族語の運命をどのように考えているのであろうか。

ジシェリエフは1958年に、2言語併用は、少数で、経済・政治・文化の面で遅れた民族が、より強い、より発展した民族の影響下に置かれた時に起こり、やがて弱い方の言語が消えて行き、そこに強い方の言語の方言が生まれる、と述べた²⁰⁾。これは無文字で少数民族言語の多いカフカース地方についての研究の中で言及していることではあるが、これだけはっきり言われると、2言語併用者の中には、ショックを受ける者も少なからずいるだろう。全国共通語としてのロシア語と、その他の民族語との関係は、彼の言う強い言語と弱い言語の図式に当てはまるからだ。さすがに、これほど大胆な発言は、ソビエトの2言語併用に関する限り、その後見当たらない。

アメリカの Weinreich は、言語の交替についてはもっと慎重で、社会的威信のある言語が必ずしも勝つとは限らず、多言語地域での実態は多様で複雑である、との立場をとっている²¹⁾。

ソビエトでは現在、民族語はロシア語の影響を受けながら、語いも豊かになり、教育、出版、その他の社会的機能を十分果たせるようになって、ますます発展しているとの報告が大半である²²⁾。「学校」とか「先生」というような用語さえなかった言語に、今や科学技術関係の専門用語を中心に、大量の借用語がロシア語から、ロシア語を通じて他の外国語から入ってきている。この点に関してバッチャエヴァは、

大量の2言語併用の状況のもとで、ますます盛んになる語や表現の借用が、母語を豊かにし発展させるのでなく、母語の独自性を失わせ、やがては消滅へ導くという考えには同意できない。周知の通り、歴史は外来語のために死んだ言語を1つも知らない。逆に必要な借用は言語を豊かにし、さらに完全なものにしていくのみである²³⁾。

と述べている。たしかに、外来語を大量に入れたために、他の言語と区別がつかなくなって消滅した、あるいは他の言語と混り合って1つになった、というような例はないのではないか。日本語に今、英語からの借用語が洪水のように入って来ているからといって、将来、日本語がそのために自然消滅していくとは考えにくい。共通な語いが増えれば、それぞれの言語で話しても、理解し合える部分が増えてくることもたしかであろうが、借用語も時がたてば入った先の言語の発音や文法になじみ、原語の話し手が聞いてもよくわからなくなるものである。

民族語関係者の報告の中には、専門用語を借用する場合、その中のロシア語のヴァリエントでなく、国際用語の方を取り入れるようにしているとか、翻訳借用(カルク)も多いとかの記述もあり、少なくとも今しばらくは、大量の借用語のために、民族語がロシア語に「押しつぶされる」ことはないように思える。ロシア語自身、外来語には非常に寛容で、現在は英語からの借

用語が、かなりの勢いで増えつつある。

ある言語が消滅するのは、言うまでもなく、その話し手がいなくなる時である。アイヌ語がその身近な例であろう。文字言語であれば、文献の上では残ることになるが、現実のコミュニケーションの手段としては使用されなくなる。ではなぜ話し手がいなくなるのか。通用範囲の広い、より有利な言語へと移って行ったためである。人間、あるいは民族にとって言語は本源的なものであるとか、言語の多様性が失われるのは残念であるとかの理由で、少数民族語の話し手たちに、彼らのことばを守るように、まわりから強制することはできない。話し手自身が真剣に自らの母語を守ろうとする時だけ、そのことばは生き残れるのである。ドイツで、スラブ系言語の一種であるソルブ語が、ヒットラーによって弾圧された時、ソルブ人たちは自分たちの言語を守ろうと、ひそかに家で子どもたちに語り伝えた。しかし戦後解放され、ソルブの繁栄が約束されたはずなのに、ドイツ語との2言語併用者が増え、ソルブ語だけの話し手は減っているという²⁴⁾。使用の自由が保障された時に、かえって話し手が減っているというのは、何とも皮肉なことである。

ダゲスタン諸語のたどっている道も興味深い。ダゲスタン自治共和国はカフカースの北側にあり、アゼルバイジャン共和国と接し、ロシア連邦共和国に属している。人口163万、うちダゲスタン諸民族127万、ロシア人19万、アゼルバイジャン人6万、チェチェン人5万、ユダヤ人2万弱、タタール人7千人となっている(1979年国勢調査)。ダゲスタン諸語のうち、現在7万人以上の話し手を持つ6言語(アヴァール、ダルギン、クムイク、レズギン、ラーク、タバサラン)に、革命後文字が作られた。

革命直後の頃まで、民族間交流のために数言語が使用されていた。アラブ語、ロシア語、クムイク語、アヴァール語、レズギン語などで、それぞれ使用分野の違いがあった。しかし民族間の交流は少なく、2言語併用は成人男子の一部に見られるだけであった。その後、文字を得た言語の機能は著しく高まり、無文字言語の使用者の間にも広まった。だがやがて、ダゲスタン民族以外との交流にも便利なロシア語の機能が増していき、そのかわりクムイク語、アゼルバイジャン語、その他の言語が民族間交流に使用される範囲は

狭まっていく。そしてロシア語を第2言語とする2言語併用者が増えていく。無文字言語の話し手の間では、母語と、ダゲスタン文字言語の1つと、ロシア語との3言語併用者も現われた。昔からの言語境界線も住民の移動によって動き、多民族が混在する地域が出てきた。そういう地域では民族間の接触も日常的に行われ、家庭の外ではロシア語で交流するようになっている。民族間の結婚も、2言語併用促進要因の1つである。

1920年代から、上記の6つの文字言語で本、新聞、雑誌が出版されるようになった。農村部の初等学校の3年間はこれらの言語で教育が行われ、中等学校の第4学年から8学年では、教科目の1つとして教えられている（高等教育はロシア語で行われている）。

現在、ダゲスタン諸語の語いの10%以上を、ロシア語からの借用語が占めている。そして音声、文法にも一定の変化があるという。たとえば、以前はなかった〔f〕の音が現われたり、ロシア人の名前に特有の父称が、ここでも使われ出したりしている²⁵⁾。

1979年の調査からわかることは、ダゲスタン自治共和国に住むダゲスタン人のうちの98.6%が、自分の民族語を母語としている。ダゲスタン外に住む者(39万人)では、その割合は86.9%に落ちる。ロシア語を母語としているのはダゲスタン内0.8%、ダゲスタン外では7.4%である。ロシア語を第2言語としているダゲスタン人は、ダゲスタン内で65.4%、ダゲスタン外で43.9%、ロシア語・ダゲスタン語以外の民族語を第2言語としているのは、ダゲスタン内1.8%、ダゲスタン外では27.4%いる。

こうしてみると、ダゲスタン諸語は、ダゲスタンの中では母語としてかなり安定しているが、外では母語としての比率を下げ、その分ロシア語を母語とする者の比率が、ダゲスタン内より高くなっていることがわかる。ダゲスタン内では、ロシア語は第2言語として確立されてきており、ダゲスタン人の2言語併用者は、全体で67.3%に及ぶ。なお、ダゲスタン内のロシア人のほぼ100%がロシア語を母語としており、民族語との2言語併用者は1.4%にすぎない。

おわりに

ダゲスタンの例でもわかるように、民族語は一般に、その民族のおもな居住地内では母語として安定しており、今後も、民族の急激な移動はないだろうから、しばらくはこの状態が保たれるであろう。しかし、いつまで彼らが自分たちの居住地内に閉じ込められたまままで暮らして行けるかはわからない。外に出れば、どうしても多数派の言語に押されていく。ソビエトでは、民族語は弾圧されているという状態にはない。民族語での出版も教育も行われている。しかし、使用の権利が保障されている時の方が、弾圧されていた時より、話し手の数を減らしているというソルブ語の例もある。

今、ロシア語は第2の言語として、非ロシア人の中で急速に伸びている。ソビエト政府はロシア語教育に本腰を入れ始めたから、今後、ロシア語を母語と同じ程度に話せる非ロシア人が、増えていくことは間違いない。もし、民族語とロシア語の2言語併用者が100%に達したら、その時、民族語はどうなるか。彼ら、特に少数民族は、自分たちの言語を絶やさぬよう、どこまで努力をするだろうか。すべての人々が、ある1つの言語で交流できるようになった時、その他の言語は、いつまでその存在価値を維持して行けるだろうか。

マリオ・ベイの次のことばは示唆に富んでいる。

国際語が生まれれば、既存の各国のことばが究極的に消滅していくだろうか。目下のところ、特定の国際語を売り込もうとしている人たちはそんなことはない、国際語は「単に」国際間の伝達のためのものであって、既存のことばは生きのび、栄えていくのだと請合っている。私見をばさませてもらえば、必ず最終的には消失していくだろう。ただ、最終的というのがいつか、数百年後になるかもしれないが。経済学では、悪貨は良貨を駆逐するが、それはだれもが将来使うために良貨をしまいこむからである。しかし、ことばの場合にはその逆が正しい。ことばは将来使

うためのものではなくて、現在使うものだから。いつでも、どこでも良しとされることばが、究極的には一部の地域にしか通用しないことばにとって代っていくだろう。そのプロセスはもちろん漸進的な、時間のかかるものだろうが、現在使われている話したことばがやがてラテン語のように文化的遺物となり、ついには実用のためではなく、もっぱら文学的価値のために研究されるようになることも考えられる。これは状況のいかに問わず、起こりうることである。というのは、たとえ使われていても、五百年もすれば大いに変ってしまって、二十世紀の現在のことばが、まさしく文化的遺物になるかもしれないからである²⁶⁾。

ソ連邦で今行われていることは、将来もし国際語が必要とされる時代が来るならば、その時各国のことばがどうなるかを占う、歴史的实验と言えるのではないか。今後も見守って行きたい。

注

- 1) 田中克彦, Н. ハールマン「現代ヨーロッパの言語」岩波新書, 1985, p. 65
- 2) 同上, p. 11
- 3) M. Bruchis, One step back, two steps forward, New York, 1982 参照。
- 4) Академия наук СССР, Опыт совершенствования алфавитов и алфографий языков народов СССР, М. 1982 参照。
- 5) ЦСУ СССР, Численность и состав населения СССР, М. 1984による。
- 6) 70年までの数字は, К. Х. Ханазаров, Решение национально-языковой проблемы в СССР, м. 1977 およびエレース・カレル＝ダンコース「崩壊した帝国」(高橋武智訳)によったもの。
- 7) ソ連邦諸民族以外の言語を第2言語とする者についてはデータがない。
- 8) К. Х. Ханазаров 前掲書による。
- 9) М. И. Исаев, Роль русского языка как средства межнационального общения („Пути развития национально-русского двуязычия в нерусских школах РСФСР,“ м. 1979) с. 49-50
- 10) 同上, с. 52
- 11) С. Ш. Шермухамедов, Могучий язык великого народа („Русский язык— язык дружбы и сотрудничества народов СССР,“ М. 1981) с. 121

- 12) 同上。
- 13) Ю. Д. Дешериев, Развитие младописьменных языков народов СССР, М. 1958, с. 207 傍点笹尾。
- 14) С. Н. Имашев, Национальная политика советского государства (“Русский язык—язык дружбы и сотрудничества”) с. 128, 傍点笹尾。
- 15) С. Ш. Шермухамедов 前掲書。
- 16) ソ連邦では就学年齢は7歳。
- 17) M. Bruchis 前掲書参照。
- 18) 田中克彦「言語の思想」NHKブックス, 1975, p. 128
- 19) 田中, ハールマン, 前掲書 p. 68
- 20) Ю. Д. Дешериев 前掲書 с.175-178
- 21) У. Вайнрайх, Языковые контакты, Киев, 1979, с.175-178
- 22) Академия наук СССР, Развитие национальных языков в связи с их функционированием в сфере высшего образования, М. 1982 参照。
- 23) Р. А. Батчаева, Двужычие и национальные школы в Кабардино-Балкарии („Пути раз. нац.-рус. двужычия“) с. 45
- 24) 千野栄一「言語学の数歩」大修館書店, 1975 参照。
- 25) Г. Г. Буржунов, Роль социолингвистических факторов в развитии двужычия („Пути развития нац.-рус. двужычия) 参照。
- 26) マリオ・ベイ「ことばの世界」(外山・平田訳) 講談社, 1979, 第Ⅲ巻 p.162-163

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)